

紹介と批評

大麻唯男伝記研究会（代表中村勝範）編

『大麻唯男』全三巻

一

大麻唯男は、大正末から昭和三〇年代初頭までの間、政党政治家として活躍した人として知られている。しかし、議会内では質問も答弁もしたことがなく、また自ら残した資料もほとんど残っていないという点で、その伝記研究がもつとも困難な人物の一人である。これまで大麻に関する文献としては、わずかに昭和三五年に刊行された坂田大『人間大麻唯男』（坂田情報社）等、若干の文献が知られているにすぎず、本格的な大麻唯男研究は、いまだあらわれていない。大麻研究の難しさは、大麻に興味を抱く者の誰もが認めるところではなからうか。このような大麻唯男研究の現状を打破するため、長年、この困難な課題に積極的

に取り組んできたのは、中村勝範本塾名誉教授を中心とする大麻唯男伝記研究会である。同研究会は、中村教授及びその門下生九名で構成され、中村教授の指導のもとで、約一〇か年をかけて大麻の関係者に対するインタビュー、現地調査など、基本資料の収集につとめる一方、この間、会員による研究発表と討議をくりかえし、絶妙のチームワークで地道な研究活動を継続してきたのであった。本書は、このような中村教授を代表とする伝記研究会による長年の共同研究の成果を全三巻にまとめたもので、全巻あわせると、一二五九頁にのぼる大作となっている。

本書は、「談話編」、「論文編」、「伝記編」の三編に分かれ、各編がそれぞれ一巻を構成している。

「談話編」は、本書の資料編ともいうべきもので、大麻唯男関係者に対する膨大なインタビューの中から、とくに重要なものを編纂したものである。中村教授が、文献資料の不足する大麻の場合、「まず頼りにした」のは、「大麻と親しかった人を訪ね、聴き取りをすることであった」（一頁）と述懐するように、本研究において、もつとも重視されているのは、こうした談話資料の収集である。インタビューの聴き手は、すべて研究会メンバーが分担し、インタビューの相手は、大麻唯男の親族、知友、政治家、秘書な

ど各方面に及んでいる。具体的には、戦前戦後を通じて地元で義兄大麻唯男の選挙を夫とともに支えた大麻伊佐子（唯男の弟博之夫人）、大麻唯男の隣家であった田上明、元文相で郷里および内務省の先輩であった小橋一太の長男小橋一雄、地元で最も有力な地方政治家の一人であった平島一、大麻唯男の親族で家庭内の大麻に詳しい西野重孝・圭夫妻、元櫻田会理事長の小楠正雄、元衆議院議員の伊藤五郎、元衆議院議員の松野頼三、元首相の中曽根康弘、元時事新報社政治部長の今井久夫、元芸者の宮口きみ子、元秘書の酒井正美、平山良輔、千馬隆幸の諸氏であり、いずれも貴重な証言を提供している。元来、関係者に対するインタビューは、伝記資料収集の方法としても有効な手段の一つであるが、インタビューの内容が全面公開されるケースは、意外と少ない。本書の「談話編」は、その意味で一つの模範を示すものといえるだろう。

「論文編」は、中村教授とその門下生による本編一七編、補編七編の論文から成り立っている。中村教授は「まえがき」において、「常に政治の黒子役に徹し、表舞台に出ない政治家大麻唯男をはじめから全体像として把握しようとすることは土台不可能であると悟ったわれわれは、まず大麻の一生を研究者の好みに応じて、勝手に喰いちぎること

にした。その上で研究対象に関係ありそうな新聞雑誌を漁り、文献の山を築き崩していった。なんと収穫の乏しかったことか。唯一の救いは大麻と関係した方々に伺う聴きとりであった。……以上のような事情の中で今日まで格闘してまとめたのが、本書に収めた二十編の論文である」と、「論文編」の成り立ちを述べている。個別研究を積み重ねる作業を通じて、全体像を構築しようとする研究方法は、政治史研究においてももっともオーソドックスな手法であり、本書の手堅さを感じさせる。

「伝記編」は、「論文編」によって明らかにされた諸事実を整理統合するとともに、なお不足する部分を新たに補充し、大麻唯男の生涯を一冊にまとめたものである。大麻の少年時代、学生時代、内務官僚時代、政界入り後の政友本党時代、立憲民政党時代、政党解消時代、さらには大戦後の公職追放、改進黨への参加、民主黨時代から自由民主黨時代へとその記述は、彼の全生涯に及んでいる。この「伝記論」は、その「あとがき」にもあるように、「メンバーの論文及び口頭研究発表をもとに内川正夫、酒井正文、玉井清、浅野和生が執筆し」、その後、これを「酒井、玉井、浅野が修正し」、最終的に中村教授が「全面的に目を通し」、完成をみたものであり、よく統一のとれた文体で、こなれ

た内容が魅力的である。今後、大麻唯男研究の基本文献として、政治史のみならずあらゆる分野の研究者に活用されるものと期待される。

以上、概観してきたように、本書は、大麻唯男に関するはじめての本格的な研究であり、「談話論」、「論文編」、「伝記編」のいずれもが学術的な価値を有するといつてよい。しかし、それらすべてをここで取り上げるとは、紙幅の制約もあり、とうてい不可能であるので、以下では、本書の中核をなす「論文編」のみを取り上げ、若干の感想を述べることにしたい。

二

まず、最初に、戦前期の大麻唯男を扱った八論文、すなわち①酒井正文「大麻唯男伝記資料——郷里、家系、その成長——」、②浅野和生「政友会分裂の地方への波及状況と大麻唯男初立候補の事情」、③同「戦前期における地方選出代議士の選挙区での活動——熊本第一区、大麻唯男の研究——」、④同「戦前期熊本における中央型政治家と地方型政治家」、⑤内川正夫「少壮政治家時代の大麻唯男——床次竹二郎脱党問題を中心として——」、⑥玉井清「戦前期日本における政党政治の盛衰——政治家大麻唯男の履歴

への影響——」、⑦酒井正文「新体制運動下の民政党と大麻唯男」、⑧玉井清「東条内閣の一考察——大麻唯男を中心に——」について、触れることにしたい。

明治三二年、熊本県玉名郡に生まれた大麻の幼少時代から第五高等学校卒業までの成長過程を追跡した①は、「論文編」巻頭の論文であるが、熊本県玉名市除籍謄本、大商家菩提寺光専寺の過去帳、第五高等学校学業成績証明書などのほか、大麻伊佐子氏（唯男の弟博之夫人）をはじめ関係者に対するインタビューを存分に活用した労作である。

同論文は、大麻が熊本中学時代の頃、はやくも「将来、政治家となって天下をとる」とその志を述べていたこと、彼は、高等学校時代、学業よりもむしろ剣道部主将として、運動部の活動に力点を置いていたこと、しかし、大麻の学業成績は、総じて良好であり、第五高等学校卒業時の成績は、甲類六八名中六番であったことなど、いくつかの興味深い事実を指摘している。大麻が彼の成長過程において、いかなる書物に接し、いかなる思想を抱いたのかは、残念ながら明らかにはされていないが、今後究明してもらいたい課題の一つである。

②は、『九州新聞』、『九州日日新聞』などの地元新聞の記事を利用し、内務省の課長から清浦奎吾内閣の首相秘書

官に転じた大麻が、熊本県から初めて立候補、初当選を果たした事情を探求したものであり、③は、前稿と同様の記事を活用して、代議士当選後の大麻の選挙区での活動を詳しく論じたものである。

大麻が政友本党の推薦候補として熊本(第三区)から初立候補をしたのは、大正一三年のことであるが、②では、大麻の立候補が事前に準備されたものではなく、政友会の分裂と対立候補の中島照寛の政友本党不参加(政友会残留)によって突然浮上したものであったこと、実質的な選挙運動期間は、ごくわずかであったにもかかわらず、大麻は、玉名郡の地主層の票をまとめて大勝したことなど、彼の政界出馬の様相が明らかにされている。また、③では、昭和三年以降の中選挙区制下の選挙における地域割りが町村単位でおこなわれていたことが指摘され、大麻の場合(第一区)も、「熊本第一区の一市五郡のうち、玉名郡全域と鹿本郡の北部一八町村を主な地盤とし、その地域内の町村でのみ」での運動にとどまっていた事実が実証されている。地域割の厳守は、大麻の所属政党以外でも同様であったのかどうか、なお知りたいところである。

さらに④は、もし政治家のタイプを政治家自身の意向が優先する中央型政治家と選挙区の意向が優先する地方型政

治家の二種に区分することができるとするならば、大麻は、中央型政治家に属すると主張するものである。同論文では、民政党結党に際し、熊本第一区の小橋一太と大麻唯男の両名が地元の詳細を得る前に同入党を決意したのに対し、原田十衛、高木第四郎の両名は、選挙区の意向にしたがって政友会に復帰したことを根拠に、小橋と大麻は中央型政治家、原田と高木は地方型政治家と区分するが、利益誘導論との関連が必ずしも十分に明らかでなく、果たしてそのような区分自体が一般論として妥当かどうか、なお検証が必要であろう。

⑤は、昭和三年八月、床次竹二郎の民政党からの脱党に際し、大麻がこれに追随しなかった事情を検討したものである。同論文は、旧政友本党系の床次の新党に参加すると思われた小橋や大麻が、なぜこれに同調しなかったのか。政治的信念によるのか政治的打算によるものなのか、その真相については、明言を避けているが、小橋や大麻の留党の判断は妥当なものであったことを主張している。小橋や大麻の留党が民政党の危機を救うことにつながり、その結果、その後まもなく成立した浜口雄幸民政党内閣で、小橋が文相、大麻が文部参与官のポストを手に入れることになったとの指摘は、当をえており同感である。

⑥は、戦前期日本における政党政治の盛衰が大麻の政治生活にいかなる影響をもたらしたかを考察したものである。大麻の政界進出の背景には「大正から昭和初頭にかけて生じた政党の官僚に対する相対的地位の向上」があったこと、しかし、皮肉にも彼が「党歴を順調にすすめる閣僚候補としての資格を有するようになった時、政党政治は崩壊し政党に配分される閣僚ポストが減少」し、容易に閣僚に就任できなかった事情などが明快に説明されている。おそらくこれは大麻のみならず、彼と同世代の政治家に共通してみられる現象であったにちがいない。

⑦は、近衛新体制運動下の民政党において同党の総裁町田忠治を実質的に支えていた大麻が、民政党の維持と解党とにいかなる役割を果たしたのかを論じたものである。周知のように昭和十三年、近衛新党運動がはじまると民政党の一部は動揺するが、徹底した党存続論者であった町田を支える大麻は、解党論を徹底的におさえたこと、しかし、一五年、近衛新党運動が「新体制」運動となって復活し、既成政党が次々と消滅する状況のなかでは、むしろ町田を説得し、民政党を解党の方向へ導く役回りを演じたことなど、対照的な二つの事実を検討し、大麻の機を見て敏な独特の政局観が明らかにされている。

⑧は、東条内閣期の大麻の動向を論じたものである。周知のように大政翼賛会成立にともなう政党解消後の我が国議会は、政府牽制の機能を著しく低下させ形骸化していた。しかし、東条内閣は、この形骸化した議会ですら自らの支配下に置くことができず、その対応に苦慮する場面も少なくなかった。同論文は、この点に着目し、東条内閣が議会対策として旧民政党の領袖である大麻を閣僚に登用せざるをえなかった事情や大麻が東条の政治的暴走を抑制する役割を果たした事実などを検証し、「東条内閣といえども議会の存立を規定した明治憲法の枠を超えることはできなかった」との結論を導いている。東条内閣期の我が国の政治体制が、ヒットラー統治下のドイツやムッソリーニ統治下のイタリアと比較して割拠性が強く独裁性がうすかったこと、そしてその要因が明治憲法の構造そのものに求められることは評者も同感であるが、この時期の大麻の評価については、政局の側面ばかりでなく戦時協力の問題をも含め、より広範な角度からの検討が必要のように思われる。

三

ここでは、終戦から戦後にかけての大麻の晩年時代を扱った五論文、①沢田次郎「終戦前後における大麻唯男の動

向」、②内川正夫・浅野和生「大麻唯男の議会復帰」、③同「大麻唯男に関する一考察——反吉田勢力結集過程における大麻の役割——」、④同「改進黨における大麻唯男のリーダーシップ」、⑤同「鳩山内閣期における大麻唯男」について、言及したい。

周知のように大麻唯男は、終戦時には、大日本政治会に属し、戦後は、日本進歩党結成に参加することになるが、①は、昭和二〇年一月から二月を対象に、大麻と大日本政治会および日本進歩党との関係を考察したものである。

同論文は、終戦前後の政局の節目ごとに登場する大麻の役割を詳しく調査し、「寝業師」ないし「策士」と評される彼の政治行動のなかにも、一定の合理性があったことを明らかにしている。

②は、昭和二六年ようやく公職追放を解除された大麻が、翌二七年の総選挙で長期にわたる政治的空白を乗り越えて当選し、議会に復帰したときの状況を検討したものである。周知のように昭和二七年の総選挙は、戦前、戦中の追放解除組の旧政治家群の大量政界復帰をもたらすことになったが、大麻の選挙区・熊本県第一区でも同様であった。同論文は、当初、苦戦を伝えられていた大麻が、結果的には、予想を超える大量得票で最高点で当選をはたした理由とし

て、「第一に、熊本県民に大物待望の世論があったこと、第二に、戦前からの支持者がいたこと、第三に、不利な状況をバネに必死の選挙戦が行われたこと」の三点を挙げているが、追放解除組に対する同情的、好意的な国民世論があったこともまた、無視できないのではなからうか。

③は、鳩山一郎を中心とする反吉田勢力結集過程において、大麻が果たした役割を検討したものである。同論文では、大麻が、もともと昵懇の仲であった吉田の自由党との連携をめざし、吉田の後継首班として重光葵改進黨党首を就任させる構想をもっていたこと、しかし、その構想が敗れた段階で反吉田の鳩山陣営からの誘いに応じ大麻・鳩山会談が実現したこと、そしてこの大麻・鳩山会談を契機として、改進黨は、鳩山を中心とする反吉田勢力の結集に加わる方向に傾斜したことなど、改進黨の動向に大麻が与えた影響の大きさが論証されている。周知のように、反吉田の保守新党は、昭和二九年一月二四日、日本民主党として発足するが、大麻の党内指導力は、引き続き民主党の党内運営において発揮されることになるのである。

④は、昭和二七年二月に結成され同二九年一月の日本民主党結成まで続いた改進黨のさまざまな局面で発揮された大麻のリーダーシップについて検討を加えたものである。

すでによく知られているように、改進黨は国民民主党と新政クラブおよびその他の小会派の糾合によって成立したため、党内には大麻系、芦田均系、三木武夫系、北村徳太郎系などがあり、その対立は、相当に激しいものがあつた。

同論文は、結党後の改進黨にとって最大の懸念であつた總裁選出に際し、大麻が重光總裁の実現に貢献したこと、吉田内閣の「抜き打ち解散」に際しては、選挙資金の獲得など選挙対策に辣腕をふるつたこと、保守新党結成の動きに対しては改進黨が反吉田新党の方向に結集するよう党内のとりまとめに貢献したことなど、具体的事例を用いて彼ら隠然たる指導力を明らかにしている。

⑤は、改進黨の指導的政治家として日本民主党の結党に参加した大麻が、鳩山一郎内閣期、すなわち昭和二九年一月二月に吉田茂の後を受けて成立した第一次鳩山一郎内閣、同三〇年三月に成立した第二次内閣、および保守合同により新たに誕生した自由民主党下の第三次内閣の時期に大麻の果たした政治的役割と活動とを検証したものである。同論文は、民主党がいよいよ保守合同に方針決定するという最終局面で、それまで保守合同に反対していた大麻が、一転して反対派を説得する役を引き受けたこと、日ソ交渉では、重光葵の慎重論をとらず、交渉推進を図ろうとする

鳩山に協力したことなど、この時期の大麻が、しばしば党内調整役として登場し、円熟した手法でその役割を果たしていたことを明らかにしている。大麻が「策士」として前田米蔵、松野鶴平と並び称される所以が、よく理解できるであろう。

以上、「論文編」の「本編」に収録された諸論文の意義を中心に、若干のコメントを加えてきたが、「論文編」には、他に「大麻の周辺部を探索」した「補編」として、七論文が収録されている。これらの論文の大部分は、大麻の選挙区である熊本第一区の選挙を分析対象としたものであり、それらをあわせると、「熊本第一区選挙史」ともいふべきものになっている。すでに紙幅が尽きたので、それらの論文の内容紹介は控えるが、その題目のみを掲げると、①浅野和生「戦前総選挙における集団投票——第一六回——」、②酒井正文「戦前期二大政党対立下の選挙における地方指導者の事大主義的傾向——熊本第一区の場合——」、③小栗勝也「非常時下における既成政党の選挙地盤の維持——改正選挙時の熊本第一区を中心に——」、④同「翼賛選挙と旧政党人の地盤——熊本第一区の場合——」、⑤中村勝範「翼賛選挙と旧政党人」、⑥鈴木麻雄

「戦前戦後における総選挙の地盤の相似性——熊本第一区の場合——」、⑦同「鳩山ブームと第二七回総選挙——熊本第一区を中心として——」の七編である。「大麻の周辺部を探索」した「補編」とはいえ、いずれも「本編」に劣らぬ労作であることを付言しておきたい。

四

以上、「論文編」を中心に、『大麻唯男』全三巻の概略を紹介してきたが、本書を全体として評価すべき点は、三つある。

まず第一に、困難な課題に真正面から取り組み、その生涯の全貌を明らかにした点である。冒頭にも記したように政治家研究、とりわけ大麻唯男のような政界の裏舞台で活躍した人物の伝記研究は、最も困難かつ手間のかかる仕事であるが、本書は、そうした難しい課題に挑戦し、新事実の発見につとめるなど、多くの成果をあげた労作である。本書は、大麻唯男に関する最初の本格的な研究として、価値がある。

第二に、精力的な資料収集をおこなっていることである。既存の乏しい資料にたよることなく、くりかえし実行された現地調査、さらには関係者に対する徹底したインタビュー

ーは、膨大な時間と労力をかけたものであり、誰も真似することができない驚異的なものである。またインタビューの成果を「談話編」として公刊したことも、後進の研究者に貴重な素材を提供するものとして特筆に値する。

第三に、共同研究者のチームワークのよさである。一般にこの種の共同研究は、全体のバランスをとったり、統一性を保つことが難しく、真に共同研究といえるものは少ない。その意味で本研究は、中村教授の指導のもと、門下生による共同研究ということもあって、全体的な統一性と一貫性があり、そのチームワークのよさは見事である。資料収集の分担といい、執筆・校正の分担といい、これほどまでに、共同研究の利点を生かした研究成果の公刊は、近年稀なことではなかろうか。

もとより本書に対する望蜀の感もないわけではない。本書の研究対象である「大麻唯男」を評価するスタンスが、やや弁護的にすぎるのはないかと思われる箇所がいくつかあったことがそれである。研究者と研究対象との間に一定の距離を置くべきことは、言うは易く行うは難しい問題であるが、評者の若干気になったところであった。しかし、そのような瑕瑾はともかく、本書が、近來稀な先駆的かつ本格的な伝記研究であり、大麻唯男伝の決定版としての価

値を有することは、いささかも揺るぐものではない。中村教授をはじめ、本書執筆者の長年の努力とその成果に対し、心からなる敬意を表したい。

（財団法人櫻田会、一九九六年）

寺崎 修